何でも屋のとある一日

カルタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
何でも屋のとある一日

【Ｎコード】
Ｎ０４１６Ｐ

【作者名】
カルタ

【あらすじ】
万事屋を営む、借金少年と借金少女のとある一日。
二人の絆の行方は……？

（前書き）

未熟な文章な上、コメディー６０％と半端ですが、最後までお付き合い戴けたら幸いです。

『万事屋(よろずや)』というものを知っているか？

『万事屋』とは、お金をもらって依頼をこなす。要は何でも屋である。

よく探すと都内に幾つかあるし、某ジャ〇プアニメなんかは有名だ。

俺、楠田勝(くすだまさる)はそんな職業に就いている。

一応高校生なんだか、クソ親父のせいで借金があったりするから、学校にも行かず働いている。

今は日曜日の昼。

客は来ない。元々客の多い仕事ではないのだか、かれこれ一ヶ月は仕事がない。

「勝、暇だね？」

今話しかけてきたのは金枝千代(かなえだちよ)。唯一の同僚であり……客が来ない原因である。

―二ヶ月前―

「雇って下さぁぁぁいっ！！」

そう言って事務所のドアをバーンッ、と開きながら少女が入って

来た。

身長は１５０位、黒髪ショートヘアに猫の髪留めをしている。顔立ちは非常に整っており……紛れも無く美少女だった。

走って来たのか、肩で息をしている彼女に……

「えーっと……ハイッ、求人情報。オススメはコレとコレとコレね。」

とりあえず仕事を紹介した。

「わーい、ありがとう……って違うわーーーっ！！」

「ぐほぁっ！！」

ボケたつもりはなかったが、見事なノリツッコミで吹っ飛ばされた。

コレが俺と千代の出会いである。

ーそれから1時間ー

「ハイ採用」

千代に事情を聞くと、境遇が俺に酷似していたため（決して外見基準ではない）、アッサリと採用した訳だが……次の日の初仕事で早速後悔することになる。

ー次の日ー

「財布探しですね？　はい、わかり……」
「私はパス」
「何でだよっ！？」
彼女の初仕事、まさかのボイコットだ。
「私は『ローリスクハイリターン』な仕事しかしないわ。財布探しなんて疲れる仕事、こんな報酬じゃ受けないわよ」
「お前社会を馬鹿にしてるだろっ！？」
結局その仕事は俺一人でこなした。
千代の悪評は一ヶ月で広まり、今に至る。
―現在―
「暇だね？　じゃねぇよ元凶！　働け！」
「えっ、なにキレてんの？　キレる十代？」
「キレてるし十代だけど違……うのか？　違うと思う！」
「どっちよ……」
「知らん。話を戻すが、お前も働け！」
「仕事が無いのにどうやって？」

「お前が言うとムカつくな。次に仕事きたら働けよ」
「まぁ内容によるね」
会話が途切れ、沈黙が訪れる。そして、
「……ハァ～」
今月何回目かも分からない溜息をつく。
(仕事こないかな……)
そんなこと思っていると……
ガチャッ
「こんに……」
「いらっしゃいませ。依頼内容は何ですか？」
「勝、早い早い」
「……ちはー」
入って来たのは小学生くらいの男の子。
俺に遮られた挨拶を、律儀に続けてくれた。
「で、金づ……お客様、用件は？」
本当に凝りねぇなコイツ。

「えーっとね、エリザベス探し！」

「私らにイギリスまで行けと？　まさか英国女王に謁見希望とは大した子ね……」

絶対違うと思う。

「……？　エリザベスはペットの名前だよ？」

「あの二足歩行の嘴（くちばし）ついた奇妙なやつ？　いくら万事屋だからって……」

「ううん、犬。」

「嘘だっ！！」

「いい加減にしろ千代！」

「痛っ！」

流石にちびっこが可哀相なので黙らせる。

「詳しく聞かせてもらえる？」

―１０分後―

「分かった。散歩中に全力で逃亡した柴犬を探せばいいんだね？」

「うん。お願いします。」

「報酬は？」

流石千代というべきか。即報酬の話に移った。

「はい、これ」

チャリーン　（↑色とりどりの日本の硬貨８枚）

……これは俺でも受けたくなくなる金額だぞ？

ましてや千代が受ける筈などな……

「はい、ありがとう。見つけたら連絡するね。」

……え？

「うん！バイバーイ！」

ガチャンッ

少年が出て行った。

「……千代、どういう風の吹き回しだ？」

「ん？　働けって言ったの勝じゃん」

「内容によるって言ったの千代じゃん」

「だから内容で決めたんだよ？」

うーん。今の千代はよくわからん。いや、いつもだけど……

「まあいい。請け負ったからには達成（クリア）するぞ！」

「了解であります！　ボソッ（こんなに早く会えるなんてね）」

「……？　なんか言ったか？」

「いや何も」

「ふぅん。まあいいや」

こうして久々の仕事が始まった。

「それじゃあ手分けして捜そう。俺は市内の東側、千代は西側な」

「了解！　見つけたら携帯に連絡ね」

そう言って、千代は西側へと走って行った。

やる気満々の千代に驚きながら、東側の捜索を開始した。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

ー４時間後ー

聞き込み、貼り紙はあまり効果を発揮せず、千代からの連絡もない。

「あとは公園か……」

自分の足で探してないのは、東側では公園のみ。
疲れて足はかなり重いが、公園へと向かった。

ーそして１０分後ー

「……ふぅ。到ちゃ……」

「グルルルル、バウバウッ！」

……いた。
俺に敵意剥き出しで吠え、今にも飛び掛かって来そうな柴犬が。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

カカ○ットォォーーッ……ピッ

「もしもし勝？」

『千代、柴犬を見つけた！東側の自然公園に来てくれ！』

「うん。わかっ……」

『うわぁ！畜生、まだ負けられねぇ！』

「どういう状況よっ！」

ピッ……ツーツーツー

「……はぁ。私まだ嫌われてんのか……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

噛み付きを避けること１０分。千代が到着した。
バスにでも乗ったのか、かなり早い到着だ。

「あっ、千代ーーっ、早く来て！俺嫌われて……」

「うおりゃーーっ！」

「えぇーーーーっ！」

千代は全速力で柴犬に向かって行き、勢いを殺さずに柴犬を蹴り飛ばした。
動物愛護団体が見たらブチ切れるだろう。

「えっ、ちょ、おまっ……なにやってんの！」

「蹴った」

「見たらわかるよっ！」

「じゃあ聞かないでよ」

千代は完全ノックアウトしてる柴犬を抱えた。

「回収完了！帰ろう！」

「大丈夫なのか、そいつ？」

「大丈夫大丈夫。この程度毎日やってたし。」

「……？まあいいか」

例の少年の家に連絡し、俺達は事務所に戻った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はい、コレ」

「ありがとう、お姉ちゃん！」

少年は、グッタリしている柴犬を何の疑問もなく受け取る。

「お兄ちゃんもありがとう！」

「「どういたしまして」」

「うんっ！バイバーイ！」

帰ろうとした少年を、

「ちょっと待って」

千代が引き止めた。

「なあに？」

「お母さんは……元気？」

何を聞いてるんだろう、コイツは？

「もちろん！」

「……そう。バイバイ」

「バイバーイ！」

今度こそ、少年は帰って行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「千代、詳しい話を……聞いていいかな？」

流石の僕でもわかる。

千代と少年は関係がある。

「……うん」

千代は静かに語りだした。

「私には両親と一人の弟がいたの。両親は5年前に喧嘩別れして、私はお父さんに、当時2歳の弟はお母さんが引き取った。飼い犬もね。お母さんに懐いてたから……」

千代は一口お茶をすする。

「離婚の理由がお父さんの借金で、まだ少し残ってる。まあ、苦し

い生活を送ってるよ。自分がそんな生活だと、お母さんは大丈夫なのかなって心配になって……探してた」

「成る程、それで働くついでに……いや、探すついでに働こうとしたのか」

「うん。ここならいつか来るかもだし、情報も集まりやすいからね」

「まあな。……で、もう大丈夫か？」

「……うん。大丈夫」

「……そっか」

これで万事解決。今回の依頼達成か……。

……そういえば、

「千代、これからどうすんの？」

「いや、普通に働くよ？気がかりが無くなったからしっかりと」

「まあ、借金返さなきゃいけないしな」

「お互いね」

「ハハッ、まったくだ。それじゃあ……」

俺は右手を千代に差しだし、

「改めてよろしく……相棒！」

「アハハッ、こちらこそ……相棒！」

千代がそれを握り返した。

（後書き）

いつもよりちょっと長めの短編に挑戦したカルタです。

相も変わらずコメディーな訳ですが、今回はコメディー要素少なめです。

……これはコメディーと呼べるのかな？

まあ、それは置いといて。

指摘や感想を大募集中です！

遠慮なく、どしどし書いて下さい！

以上、カルタでした～！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0416p/

何でも屋のとある一日

2010年11月21日08時02分発行